

ケアを担う外国につながる子どもたちの現状分析

多文化共生社会におけるヤングケアラー

和歌山工業高等専門学校 原めぐみ

1 目的

移民政策が欠如している日本において、外国につながる住民への福祉については、積極的に議論されてこなかった。一方、移民研究では、ジェンダー化されたケア労働についての問題点が取り上げられてきたが、移民の子どもたちはケアの受け手としてのみ描かれてきた。そこで本報告では、「ヤングケアラー」という視座を取り入れ、ケアの担い手としての外国につながる子どもたちの実態を探ることを試みた。なお、本報告では、「家族メンバーのケアや援助、サポートを行っている（あるいは行うことになっている）18歳未満の子ども」とする Becker, Dearden & Aldridge (2000)のヤングケアラーの定義を採用する。

2 方法

報告者は、2013年9月から現在まで、大阪市で開催されている外国につながる子どもたちを対象にした学習教室で活動をしており、その教室での参与観察および保護者やスタッフへの聞き取りから考察を行った。この学習教室に通う子どもたちの年齢は7歳から18歳（小学校1年生～高校3年生）であり、親の出身国は、フィリピン、中国、タイ、ブラジル、韓国である。

3 結果

①身体的ケア：子どもたちは、日常的にきょうだいの世話をし、食事の準備をする等の家事を担っている。家庭内役割の負担が重く、学校を休みがちになったり、習い事等には行けなかったりという問題が出ている。②精神的ケア：外国籍の親がパートナーのDVや職場でのストレスから精神的に不安定である家庭では特に、子どもが親の精神的ケアを担っている。③親の通訳等の行政的ケア：北山・石黒論文でも確認されるように、親が外国籍の場合、通訳業務を子どもたちが担うことがある。必ずしもバイリンガルというわけではない10代の子どもたちが行政窓口や病院などで親に通訳をしている。④物質的ケア：ひとり親家庭の物質的不利益を補うために、早期から賃労働をし、家計に貢献することが期待されている。それゆえに進学を断念する等の支障が出てくる。

4 結論

外国につながる子どもたちの家庭内でのケアの状況を考察したが、オーストラリアの移民の背景を持つヤングケアラーの調査から推察しても、現在の日本ではヤングケアラーの存在がまだまだ不可視的である。行政や地域において、認識を高めるためにも、研究を深めていく必要がある。そして、コミュニティ・ケアの可能性について、実践の中で確かめていかなければならない。

文献

Becker, S., Dearden, C. and Aldridge, J. (2000) 'Young carers in the UK: research, policy and practice', *Research, Policy and Planning*, Vol. 8, no. 2, pp. 13-22.

Carers Victoria Inc, Centre for Multicultural Youth, and Ethnic Communities' Council of Victoria (2011) "Refugee and Migrant Young People with Caring Responsibilities: What do we know?"

北山沙和子・石倉健二(2015)「ヤングケアラーについての実態調査：過激な家庭内役割を担う中学生」『兵庫教育大学学校教育学研究』27, pp.25-29.